

【ねがいましては】

令和7年2月25日

KYOWA SCHOOL

第412号

「次世代へのメッセージ」

昨年、8月の読売新聞からです。東京大学安田講堂で行われたノーベル賞受賞者を囲むフォーラム～次世代へのメッセージ「ニュートリノが解き明かす宇宙」より、「これだね」というメッセージを取り上げます。

ニュートリノと言っても物理学の世界の語彙なので「なんだ？」となってしまうがちです。簡単にまとめますと、素粒子の中の一つだそうで、こう書くと今度は「素粒子」ってなんだ？・・・物質を構成している最小の単位のことだそうです。分子を構成しているのが原子、その原子の中にある「電子・陽子・中性子」などのことを素粒子というのだそうです。その素粒子は17種あるそうで、その中の最も質量の小さいものがニュートリノと呼ばれているそうです。

これが一体何なのさ？ となってしまうのが一般の方の反応なのでしょうか。それでも「なぜ」とこだわる方々が研究者となりそうです。何が何でも「なぜ」のこたえを突き止めるぞ・・・。

そのような世界に名を馳せてこられた方々の講演がパネル討議形式で行われました。注目すべきはここへ来られた聴講者の方々です。中学生・高校生約500名が集結。皆、前向き100%、素敵です。

そこで公演された方のひとり、千葉大学教授の石原安野（いしはらあや）さんの言です。「子どもの頃から大好きなのは読書で、私をワクワクさせ、冒険を教えてくれるような本を読んできた。科学者として大切な想像力は読書によって培われた。高校生の時に何を勉強したらいいのか聞かれることがあるが、特にないと思っている。逆に、唯一絶対「ならない」でほしいことは、「勉強を嫌いにならない」「失敗を嫌いにならない」ということだ。おもしろいと思えるテーマに出会ったら勉強したくなる。実は高校生に対するメッセージというよりは、大人たちがすべきことだ。学生たちを勉強、失敗嫌いにしないでほしい。失敗したら褒めるぐらいの気持ちで見守ってほしいと思う。」

この部分、実は私が普段思っていることと全く同じなのです。普段、子どもたちに「失敗や間違いをするから、成長できるのだ」と・・・。真剣に失敗したとき、その失敗が大きく記憶の中に残ります。ですから同じ失敗をしないように自らが意識し始めます。これが成長したということ。精一杯の取り組みが間違いであったとしても、その時の間違いが強く記憶に残ることで、徐々に同じ間違いをしないようになっていく。というわけです。

ですから自らが自らの責任で真剣に取り組んだことに対しての結果というものは、そのこと自体がどちらに結果が出たとしても貴重な経験として自身の記憶の中に宿ってくれるということです。ただ指導者の言うことに従っていただけでは自らの意思はなかなか働きません。だとするとそこから発生した失敗や間違いは、ひょっとすると自身の記憶に残りにくいものであり、ややもするとそこから発生した結果を他人のせいにするようになり、当然その結果は自身の以後に生かせなくなってしまう。だとしたらその行為はやらなかったと同じことになります。

子どもたちが「勉強」に抱く感情の基礎がどれだけ大切であるかを再認識させられた記事でした。あらためて今、私がここで言い続けていることはとても重要なことなのだと確信を抱いた次第です。

しかし現状は・・・。学校でのテストが返却された。その結果を見てすぐさま不安な表情を浮かべる方（大人）がいっぱいいます。もしこれを読んでいらっしゃる方が「はっ」とされたのならここからが最重要な部分です。

子どもはその不安な表情を浮かべた方（大人）のその次の表情をひやひやしながら見ます。その時点でその子のころの中には、「勉強は楽しいな」という感情はあるのでしょうか。ひょっとすると繊細なこころを持った子であれば、これだけで「小さなトラウマ」を抱えてしまうかもしれません。その不安な表情を浮かべた方（大人）のことが好きでたまらない子に不安を抱かせることは、同時に苦しみを抱かせることになります。さらに子は強い罪の意識を抱くことになります。きっと石原教授はそのことにも触れられたかったのかもしれませんが。だから最後に書かれたことです。「失敗したら褒めるぐらいの気持ちで見守ってほしい」・・・。

これを読まれている方に質問です。子が失敗したら褒めていらっしゃいますか？

ここへ通う小・中学生たちは算数・数学の計算分野に取り組む際、はじめの一行から何行も下へ「＝」（イコール）を書き連ねてやがて「答え」へとたどり着きます。私はその書かれた式の途中をとくに重要視します。一行ずつ丁寧に確認していきます。そして間違いを発見、すると「あっ」という声が同時にこども本人の口からこぼれます。「良かったね。そんなに強く反応できたのだから、そのことが強くこころに残るでしょ。だからこれからは同じ間違いをしなくなるよ。これが成長できたってことなんだね。本物の学びです。」そう言われた本人は間違えても結構満足げな表情で席に戻ります。小学校へ上がった時から「まちがい」はとても大切なことを学んでいるということを浸透させてあげることが真の教育なのではないでしょうか。世の中は、とにかく「勝敗」が支配してしまいがちです。当然「勝った」を私たちは常に優先し、そこへ目を向けがちにします。勝つほうが気分がいいに決まっていますから・・・。でも、学びの楽しさは「間違いや失敗」を楽しんでこそ味わえるものなのだという「こころの下地」を子どもたちに持っていただきたい。

「ひと」は何でもくらべたがります。しかし強調したいのです。「勉強に『くらべる』は必要ありません」。これからもどんどん間違いを楽しみましょう。君、いつ見てもいい表情だねー！・・・ひょっとして？